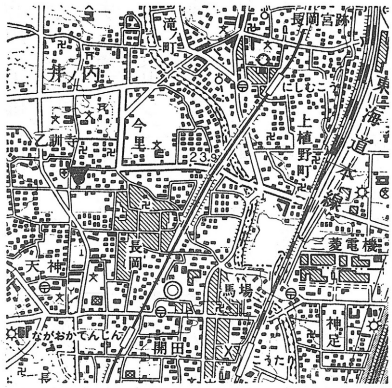
京都・今里城跡

1 所在地　京都府長岡京市今里二丁目
2 調査期間　一九九〇年（平2）七月～八月
3 発掘機関　㈶長岡京市埋蔵文化財センター
4 調査担当者　原　秀樹
5 遺跡の種類　城館跡
6 遺跡の年代　一六世紀中葉
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

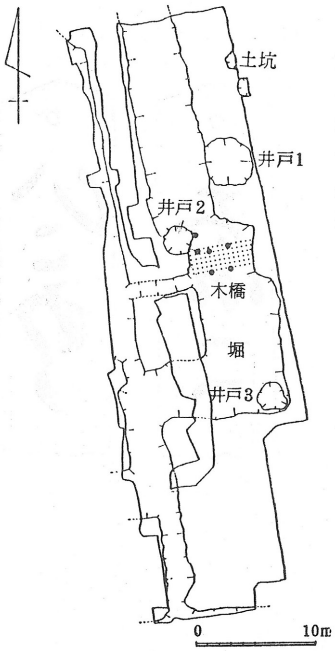
今里城は、京都盆地西南部の乙訓地方に位置する戦国期の城館跡である。かつて西岡とよばれた京近郊の桂川西岸地域には、多くの中世城館が存在したが、現在ではわずかに物集女城・開田城・勝龍寺城・山崎城などが残るのみである。戦国期における西岡の土豪・国人の動向については、『大乗院寺社雑事記』や野田泰忠の軍注状、および織田信長の家臣で西岡一帯の領主となった細川家の史料などから、その一端を知ることができる。



（京都西南部）

今里城については地表面から堀や土塁を確認するのは困難であるが、その構造（縄張り）はこれまでの発掘調査から、乙訓寺の南側、風呂川をはさんだ北岸と南岸域に想定される。前者では礎石建物と井戸、柵列などを検出しており、復原された江戸時代の地名によると「やしき」と呼ばれた一画にあたる。後者は、折れを構えた堀と井戸が検出された本調査地旧小字城山にあたり、同じく地名復原では西端に「ほりが内」という字名が確認される。今里城は当地を本拠とする土豪・国人であった能勢氏の城館と考えられる。なお本地点は、旧長岡京の京域および今里遺跡に含まれており、今回の調査も右京第三五六次調査として実施したものである。

遺構は耕作土を除去した地山面で検出した。今里城の遺構は堀と



遺構配置図

井戸、木橋の橋脚などである。堀は南北方向から西へ延びる幅五〜七m、深さ一・二〜二mの箱形を呈する大きなものと、これに接続する幅二m、深さ一mの小さなものがある。井戸は素掘りのものを三基検出しており、このうち最も大きな井戸一は直径四mある。橋脚は堀が東へ張り出した部分で検出した。堀の埋土は底に堆積した下層、城館廃絶後に堆積した中層、完全に埋め戻された上層におおよそ分けられる。また北半部の中層上面からは、多くの葉や種子が出土しており、堀底には根株が残る。

遺物は堀に架かる木橋の北側と井戸一に集中しており、いずれも廃絶時に投棄されたものである。木簡以外の文字資料は、見込みと底部外面に「十七日」と墨書された土師器皿が一点ある（後掲）。この他に瓦器の鍋・羽釜・鉢、備前焼の擂鉢・お歯黒壺（X線撮影により針金状の鉄線と元豊通宝の存在が判明している）、信楽焼の甕・擂鉢、瀬戸・美濃焼の天目茶椀、白磁、青磁、右巻巴文軒丸瓦、石臼、凝灰岩片、鉄鎌、漆器椀、曲物、蓋・底板、蓋付きの小型の入れ物、下駄、たも、毬杖遊びの毬と考えられる木球、刀形木製品、船形木製品、両面に朱描き文様のある羽子板、橋脚の柱根、杭、焦げた建築部材、土壁、種子、獣骨などが出土している。これらの遺物は、土師器皿の特徴から、おおむね一六世紀中葉を下限とするものである。

8　木簡の釈文・内容

(1)　・「○ひこ五郎」
　　・「○大永二　」

77×24×5　022

木簡は圭頭状を呈する頭部に小孔をあけており、下端部は切断される。厚さは下端部にかけて厚くなる。樹種はスギ。「ひこ五郎」については肉眼で判読できるが、「大永二」は赤外線テレビで判明した。

大永二年（一五二二）は、旧乙訓郡を中心に二八カ村で構成される九条家領小塩荘の田地や字名、年貢米の数量と納付者について村毎に検注した「山城国小塩庄帳」（現存するのは寛文一〇年〔一六七〇〕の写本。『九条家文書』一五八一号）が作成された年である。「いまさと」（今里）には十一筆合計一町九反の田地があり、この中には次のような記載がある。

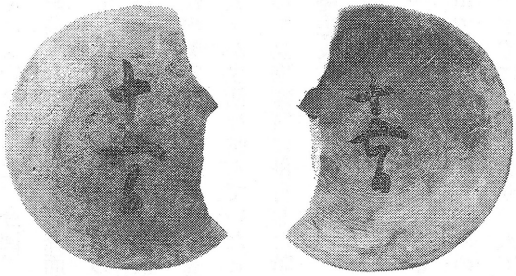
五
一反
かめい　定米四斗一合五夕　二郎太郎より渡
のせひこ五郎

これは、のせひこ五郎が小字かめいの田地一反から四斗一合五夕の年貢米を九条家に納めるべきことを記したものであり、注記には以前の所有者が書かれている。「かめい」（亀井）は乙訓寺の西側に位置する旧小字名であり、現在の今里五丁目にあたる。のせ姓は今里の土豪・国人であった能勢氏を指しており、のせひこ五郎は名字をもつ有力者の一人として耕作農民と区別される。木簡に記されたひこ五郎についても「小塩庄帳」と年号・人名が一致すること、能勢氏の城館から出土したことより同一人物と考えられる。

今回の調査では、大永二年の「小塩庄帳」に直接結び付く木簡を初めて確認するとともに、今里城の構造についても新たな成果を得ることができた。また多彩な木製品の出土は城館の暮らしをほうふつとさせる。これらは能勢氏と今里城の関係を遺構・遺物から明らかにした点で重要である。木簡は形態と記載内容から、城館や村内で使用されたものと考えられるが、その用途については今後の検討を俟って判断したい。なお、「小塩庄帳」については、熱田公「山城国小塩荘について」（永島福太郎先生退職記念会編『日本歴史の構造と展開』山川出版社　一九八三年）を参照されたい。

木簡の解読にあたっては、㈶向日市埋蔵文化財センター清水みき氏と向日市文化資料館玉城玲子氏のご教示を得た。赤外線テレビと樹種鑑定については、㈶京都市埋蔵文化財研究所岡田文男氏にご協力を賜わった。またX線撮影では奈良国立文化財研究所村上隆氏にご協力を賜わった。「小塩庄帳」と能勢氏に関する史料については、長岡京市史編さん室より多くのご教示を得た。

9　関係文献

長岡京市教育委員会『今里地区古文書調査報告書』解説篇（『長岡京市文化財調査報告書』二三　一九九〇年）
長岡京市史編さん委員会『長岡京市史』資料編一（一九九一年）

（原　秀樹）